

# 三年大工 — 渡部俊治 [後編]

およそ二八年前から金山町が推進している「街並みづくり100年運動」。行政、大工、森林組合、そして住民までもが一体となって数十年先を見据えたプロジェクトは、各方面から注目を集めている。一方で、その根幹となる金山型住宅<sup>\*</sup>の作り手を取り巻く環境は厳しく、将来安泰とは言い難い。金山にその人ありと称される渡部棟梁のように杉を使いこなす職人に求められる人柄とは…。



渡部棟梁が見せてくれた金山大工の法被の内側には「不器用の一心」の格言。そこには深い意味が込められていた。

## 家づくりは町づくり

渡部棟梁の地元・金山町では、昭和五十九（一九八四）年から建築家、まちづくりの専門家達と協力し、美しい景観形成と地域産業の活性化を目指し「街並み（景観）づくり100年運動」に取り組んでいる。その中で、金山型住宅の建築を奨励するために、町内で住宅を新築・改築する際に「金山型」の条件を満たしていれば、町が助成金を給付。これを毎年積み重ねることで、百年後には町のすべての民家を金山型住宅にしようという壮大な計画だ。そのため町

では江戸時代から続く杉の植林を推進して「金山杉」のブランドイメージを高め、金山型住宅の伝統的な建築法を受け継ぐ「金山大工」の技術保存にも一役買っている。

渡部棟梁は三〇年以上前から金山型住宅の建築に従事。むろんプロジェクトにも参画している。

「心がけてるのは、『景観にそぐわない』仲間はずれの住宅をつくらない」っていうこと。仲間はずれがいると、どうしても全体が狂ってくるんだな。金山型住宅は百年もつけども、他の家はせいぜい二、三〇年、一世代でしょ。何世代か後に『仲間はずれ』に気づいて、金山型にする人がもっと増えるといいな」

運動が始まってからおよそ四半世紀、町の全家屋に占める金山型住宅の割合は、当初の約一五%から約三六%へと着実に増加している。「ここに生まれて、同じ山から流れた同じ水飲んで、同じもの食べて育ったんだからな。木は親であり、すべての始まり。人は必ず木のもとに帰ってくる。そう信じて、木をいっぱい使って人を和ませる家をつくってるんだ」

## 町の方向性を決めた長老の一言

金山町の100年運動の契機となったのは「住宅建築コンクール」であった。



金山町の町並み

<sup>\*</sup>かつて宿場町だった金山町に残る伝統的な住宅。豪雪地帯なので、傾斜が急な切妻屋根を持ち、白壁・板張り、梁や柱に太い材料をふんだんに使った頑丈な構造が特徴。



わたなべ・しゅんじ◎昭和24年生まれ。金山町で7代続く大工の家で育ち、18歳で親類の宮大工に弟子入り。その後日本住宅の建て方も学び、31歳の時から地元金山町で大工となる。伝統工法による金山型住宅の普及に尽力し、現在は新庄最上建設総合組合の金山支部長を務める。



左/金山町森林組合製材所の杉井氏は北海道美深町出身。全国各地で木材に関わる仕事に就き、最後にこの金山町に落ち着いた。杉に限らずさまざまな材種の特性を熟知し、大工職人とも対等に渡り合うスペシャリスト。右/森林組合所有の保管庫。樹齢200年を超えるような木材もここに保管されている。保管庫には全国から買付けに来るといふ珍しい木材もストックされている。

## 「伝統ってものはな、正直に仕事に向き合う心が生むんだ」

過疎化が進行していた当時、金山町では多くの人々が冬期には出稼ぎに出ていた。町内の大工達もこぞって県外に出稼ぎに行き、豊富に出回る新建材の手軽さ・便利さを覚えて、県内でもそれを使い始めていた。

金山町森林組合の杉井参事は振り返る。「それまでの大工の技術といえば、自分で材料を探して、自分で削って自分で建てることが大前提。それなのに工業製品ばかり使ったら、技が磨る一方になる。そこで大工さんたちの長老が待ったをかけたんですよ。『技を磨かない大工は大工じゃない』と」

これをきっかけに、昭和五十三（一九七八）年から住宅建築コンクールが始まった。金山型住宅の普及と同時に、大工職人が技を競い合う場を設けるのが目的だった。

「我々森林組合の青年部ができたのもそのころです。組合で住民のみなさんにアンケートをとったら、九割以上の方が金山の杉を町のシンボルとして誇りに思ってる、と。そこで行政にも働きかけて、間伐とか森林に関わるイベントが開かれるようになって…その流れが景観づくりの運動につながってるんです」

金山大工の将来を憂えた長老の苦言が、その後の金山町のあり方を決めたといっても過言ではないのかも知れない。

### 「不器用の一心」

「不器用な人は、はじめは覚えは遅いけど、覚えたらそれだけを一心に極めようとするから、技は本物になる。器用な人は仕事は早いけど、最初からできることを深くは追究しないから、最終的に不器用な人に負けるってことだね」

「弟子を育てるってことは、結局人間づくりだね。言葉で教えた技なんて、たとえ身につけてもうわべだけ。きっちりした仕事をするようでも、人間ができてない人がやったものほどか頼りないんだな」

### 不器用の「一心」こそ名匠への第一歩

金山大工の今後を気にかけている点では渡部棟梁も同様だ。

「自分も含めてあと一〇年くらいはがんばれるだろうけど、そのあとが心配だな。うちにも十九歳で弟子入りしてがんばってたやつがいたけども…七年たったのを一区切りにして、一度親元に帰したんだ」

現在、渡部棟梁には弟子はいないが、新庄最上建設総合組合の金山支部長として後進の育成、技術の向上に奔走している。今年の六月には、伝説的な宮大工・西岡常一棟梁のただ一人の内弟子として知られる小川三夫氏を金山町に招き、研修会と講演会を開催した。

「世の中不景気で気持ちも停滞して、金山型住宅の伝統工法も頭打ちで、数が伸びてないんだ。そこで気分も新たに、がんばってる職人たちの気付け薬になるようなことができないかということ、あの人を呼んだんだ。上をめざすには、より上の人から学ぼうということだね」

法輪寺や薬師寺など国宝級の伝統建築の改修に数多く携わってきた小川棟梁の言葉は、職人たちに深い感銘を与えた。

その小川氏の教えで、渡部棟梁が共感している金言がある。

「『伝統』なんてものに決まりはない。不器用でも正直に自然や木と向き合って、木を大事にして家を建ててれば、自ずと人を大事にする心も生まれてくるもんだ。そうやってつくった家が、何年かしたら『伝統』って呼ばれるようになるんだ」

大工に求められるのは、技だけではない。「この人に家づくりを任せたい」「建ててもらいたい」と思わせる、木と家への真摯な姿勢こそが、棟梁を棟梁たらしめているのだと実感させられた。



渡部棟梁の大工道具